

九州地方におけるナイフ形石器について

二 宮 忠 司

— は じ め に —

九州地方におけるナイフ形石器の研究は、まだはじめられてまもない時期で同時に九州地方のナイフ形石器の背景は複雑な様相を示し層位的、組織的、体系的、編年的にもしだいにあきらかになりつつある時期である。^{注1}^{注2}

この時期にナイフ形石器を論ずるのは、むしろ冒険に等しいが、ナイフ形石器を形態的、技術的機能的に検討してみる冒険をあえて行なってみてみたいと思ったしだいである。

現在、九州地方のナイフ形石器の発掘調査地点、表面採集地点の数は100ヶ所をかぞえ、層位的に把握されている遺跡も12ヶ所をうまわる数となり、この点からも検討の必要性を感じたしだいである。〔図1、表1〕

なおナイフ形石器の編年的位置、共伴遺物(台形石器、尖頭器、切出形石器、細石器)の石器組成の問題は、後日改めて論ずる機会を待ちたい。

1. 形態分類

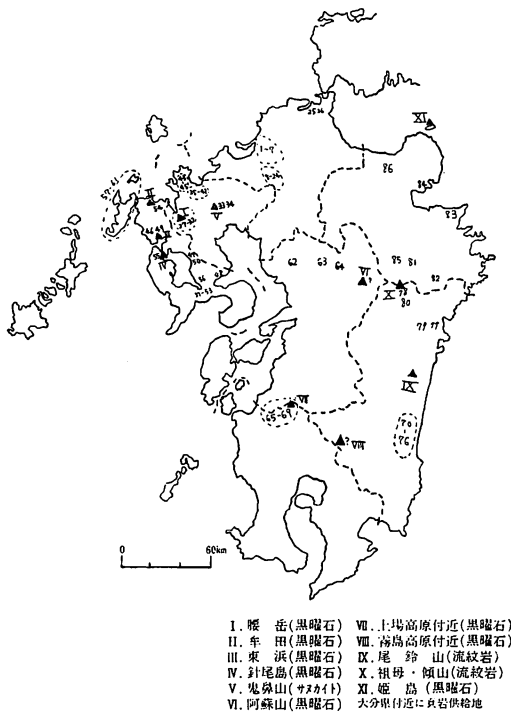
ナイフ形石器の一つの特徴は、Bluntingの部分あり、このBluntingの部分から形態的に分類を行った。また刃部の傾斜角度における区別も可能性をもつため、Bluntingの部分の分類に組み合わせて分類を試みた。^{注3}(第2図、第3図、第2表)

刃部傾斜角度の計測方法は、第3図に示すごとく、ナイフ形石器の先端部と基部の中心を結び、その線の中心点と刃部と基部側のBlunting終了点の接する点を結び、刃部側の角度を計測する方法である。

この二つを組合せた形態分類は第2図に示すごとく6型式に区別が可能であった。^{注4}

(1) a型…a型は、4つに区別できる。

a I型…a I型は、形態的には、幾何学的な要素を多く持ち、Bluntingの施してある部分



図一 1 遺跡および石材産地

表～1 九州地方におけるナイフ形石器の出土地

福岡県		30 麴山 "	60 轟池 "
1 蒲田遺跡		31 平沢良第二地点 "	61 番岳下 "
2 駕輿丁池畔 "		32 渚 "	熊本県
3 戸原 "		33 綿打 "	62 中原遺跡
4 白水池 "		34 経ヶ峰 "	63 松島 "
5 諸岡 "		35 笹ノ尾 "	64 宮山 "
6 日佐原 "		36 コクリュウ "	65 石飛 "
7 雁巣砂丘 "		37 八幡 "	66 ぐみの木坂 "
8 野黒坂 "		38 八幡溜 "	鹿児島県
9 杉塚 "		39 一本木	67 上場遺跡
10 峠山 "		40 大平山山頂 "	68 下末吉 "
11 石崎 "		41 分校入口 "	69 御岳 "
12 針摺 "		42 牟田辻 "	宮崎県
13 常松 "		43 原 "	70 垂水公園遺跡
14 永松 "		44 鳥巢神社境内 "	71 船野 "
15 八並 "		45 日出松 "	72 仲間原 "
16 若江 "		長崎県	73 那珂 "
17 津古内畑 "		46 岩下洞穴遺跡	74 下那珂 "
18 津古上ノ原 "		47 遠目 "	75 田野 "
19 福島鎮ノ神 "		48 百花台 "	76 下山田島 "
20 屋形原 "		49 えぼし台 "	77 吉野 "
21 松延 "		50 かぶら堤 "	78 出羽洞穴 "
22 中牟田鬼神山 "		51 常崎 "	79 岩土原 "
23 大曲り "		52 琴尾山頂 "	80 新畑洞穴 "
24 三沢 "		53 坪迫 "	大分県
25 八幡製鉄所本事務所裏側の台地		54 明賀谷 "	81 岩戸遺跡
26 八幡製鉄所の江梅寮横の崖		55 白似田 "	82 聖獄洞穴 "
佐賀県		56 米山 "	83 丹生 "
27 菖蒲谷遺跡		57 城ヶ岳 "	84 早水台
28 鈴桶 "		58 石橋 "	85 戸屋 "
29 平沢良 "		59 上石 "	86 小倉池

注5

は、刃部とする一辺を残し、背の部分と基部の部分に加えている。刃部傾斜角度は、90度内外を示す。素材は、横長剥片、不定形石核から剥離した縦長剥片、Small Blade 状剥片、Blade 状剥片を利用している。折断、切断技法は、持ちいた形跡が強く、bulbはすべてcutされ、その方向も基部

注5

注7

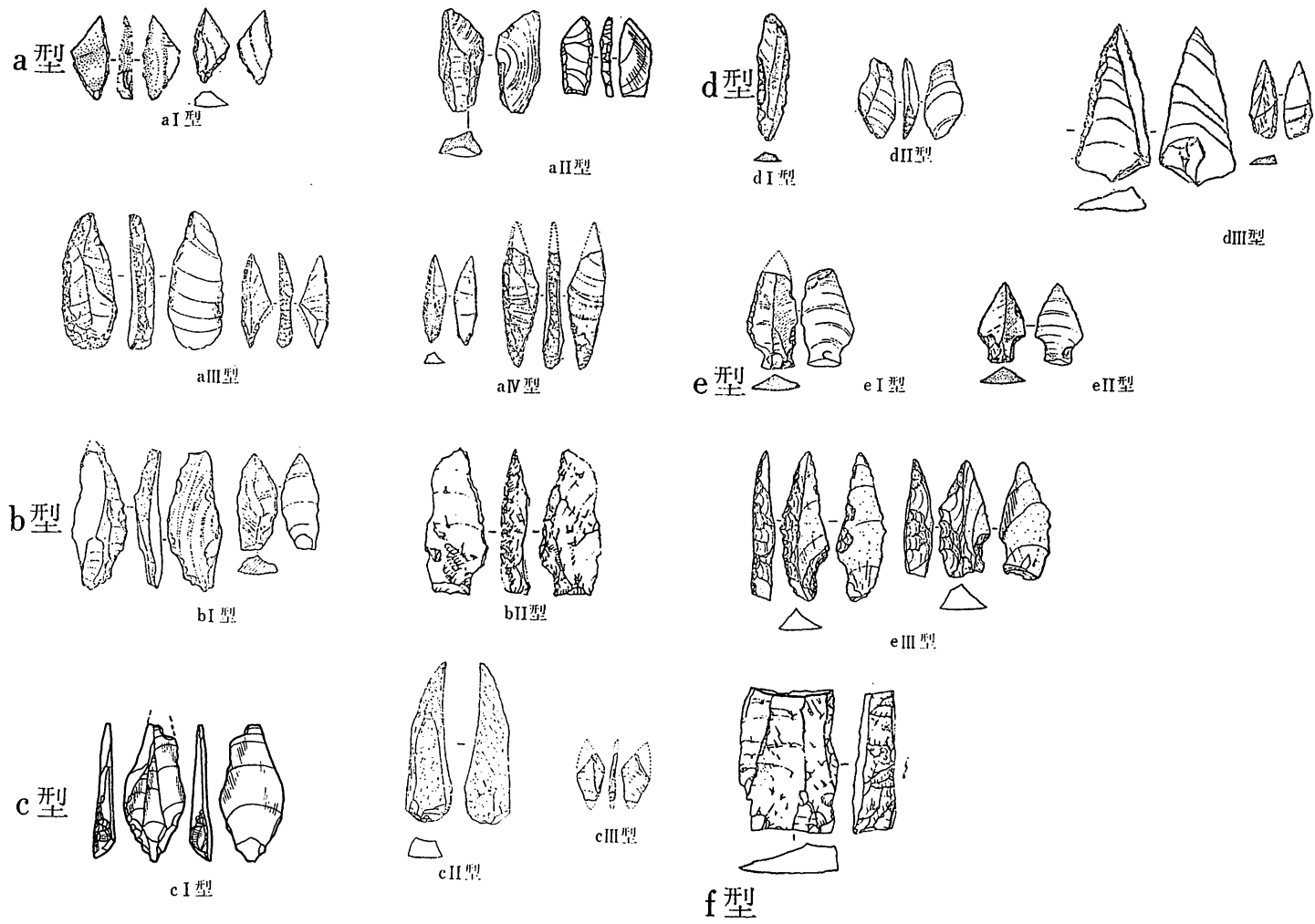


図-2 ナイフ形石器形態分類 (縮尺不統一)

先端部、横位を示し、法則性は認められない。これは、素材の選択時、及び製作時の刃部の選択により表われた結果であろう。先端部、基部の尖がり具合は、先端部がほとんど尖がっているのに対して、基部は尖がっているものと、丸みを持ったものと半々を示している。

a I型のナイフ形石器はすべて小形(5cm未満)であること、横巾が広く、最大巾が刃部と基部との接点の場所で、二等辺三角形に近い形態を示すところからa IV型との区別も可能で、これらの点がa I型の特長となる。また正面観からの観察によれば、右刃13点、左刃4点と右刃の数が多し。

a II型

a II型のナイフ形石器とa I型のナイフ形石器の相異点は、刃部傾斜角度が、a II型の一例を除くと50度から60度の値を示す点。形態的には、a I型は、幾何学的な二等辺三角形に近いが、a II型は、形態がさまざま幾何学的ではない点。素材は、横長剥片が主体となり、先端部、基部の部分の尖がり具合は丸みを持つ例が多い点などが挙げられる。a II型もまた、a I型と同様小型のものが多く折断、切断技法の可能性を持ち、素材復元によるbulb方向は、一定せず横長剥片を素材としているナイフ形石器でも先端部、基部の部分に近い状態を示している例もある。

a II型の製作方法は、a I型と同様に刃部となる一縁部を残し、他の縁部にBluntingを施す方法である。このa II型のナイフ形石器は、関東、中部地方で出土する切出形石器と呼ばれている石器も含まれている。

a III型

a III型のナイフ形石器は、刃部傾斜角度の平均値が110度前後でまとまる(最大値151度最小値95度の二例を除外すると)。

素材のほとんどが縦長剥片(Small Blade状剥片、Blade状剥片を含む)を主体とし、量的には、Small Blade状剥片と考えられる剥片が多数をしめ、折断、切断技法を有している場合と、素材をそのまま利用している場合とがある。

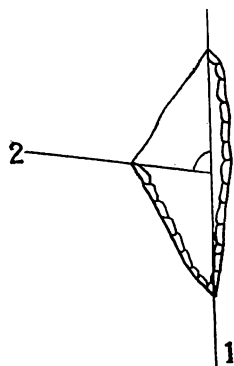
Small Blade状剥片、縦長剥片を素材としているため素材復元のbulb方向は、先端部側と基部側とに区別され、bulbはすべてcutされている。また、先端部、基部の尖がり具合は、そのままほとんどが尖がり、基部が丸みを持つ例は2例しかない。a III型のナイフ形石器の大きさは、大型と小型の二種類に区分され、基部の部分の主要剥離面側の二次加工の剥離は、注目せねばならないであろう。Bluntingの部分は、a I型、a II型同様に一辺の鋭利な部分を刃部として選択し、他の縁部にBluntingを加えるが、基部の部分は全長の約 $\frac{1}{2}$ ほど加工が加えられている点、横巾がせまく木葉形の形態を示すところからa I型、a II型との区別は容易である。また、a III型のナイフ形石器の分布は、特に西北部九州に集中しているが、ただ熊本県石飛遺跡にa III型が4点出土している点は、興味深いものがある。

6型式15区分の中でa III型が22点で形態分類の中で、最大数量を示し、また正面からの観察による右刃左刃の数は、右刃10点、左刃12点とほぼ半々を示している。

a IV型

a IV型のナイフ形石器は、形態的観察からa III型に類似するが、この石器の特徴は、基部の部分

図
1
ナイフ形石器の計測方法



からのびるBlunting加工が、全体の約半分以上を示している。ゆえに刃部傾斜角度は、90度から60度内外を示す。素材はそのほとんどが縦長剥片 (Blade状剥片, Small Blade状剥片をも含む) で、そのため素材復元におけるbulb方向は、先端部側と基部側に分けられ、一定方向に定まっていない。また先端部、基部の尖がり具合は、そのほとんどが尖がっている。大きさは、大型と小型とがあり、小型は、4 cm内外のものがほとんどである。小型大型共にa III型と同様に基部の主要剝離面側に二次加工が加えてある例もある。

これらの点からa III型とa IV型との相異は、Bluntingの加えてある部分と刃部傾斜角度とによる区別だけで、むしろa III型にふくまれるべきものかもしれない。また現在の出土地点をみても西北部九州に集中して発見されている。

(2) b型

b I型のナイフ形石器は、背の部分だけにBluntingを施し、刃部傾斜角度は、180度内外を示し、素材は、横長剥片、縦長剥片を利用し折断、切断技法の用いたものとそうでないものとは半々を示している。

先端部、基部の尖がり具合は先端部が尖がっている例、6点、丸みを持つ場合が2例で、基部は、丸みを持つか、平坦面を持つ場合がある。大きさは、小型を示すが、大型の存在も十分考えられる。

このようにb I型のナイフ形石器は、瀬戸内地方の国府、宮田山のナイフ形石器の技術との関連も考えなければならないが、九州地方では、縦長剥片を素材としたb I型のナイフ形石器も存在する点を重視し、今後、問題にしなければならないと考えている。

b II型

b II型のナイフ形石器のBluntingの部分は、b I型に基部の一部に施し、形態的には、背と基部を持つことになる。b II型の特徴は、素材の点にみられ、縦長剥片がその主体をしめ、刃部傾斜角度は、150度から160度内外を示す。素材の折断、切断技法は、ほとんどみとめられずb I型と区別できると考えb I型の特徴ともなっている。先端部、基部の尖がり具合は、b I型と同様に先端部は尖がり、基部は、平坦面が丸みを持ち、正面観察による刃部方向は、右刃3点、左刃6点と左刃の割合が多い。

(3) c型

c I型

九州地方のナイフ形石器で、c I型が認められるのは、船野遺跡出土のナイフ形石器の中で見られる。船野遺跡のc I型のナイフ形石器は、形態的には柳葉形に近く、Bluntingは基部の部分だけ施し背の部分には加えない特徴を持つ。素材は縦長剥片、それもSmall Blade状剥片を利用し、素材の折断、切断技法は、ほとんど見られず、刃部傾斜角度は、ほぼ150度内外を示している。また、先端部、基部の部分は、ともに尖がっていて、大きさは小型のナイフ形石器が多い。

c II型

c II型のナイフ形石器のBluntingの加えてある部分は、基部の部分と、背の部分の先端部の一部分で、九州地方では、百花台、船野遺跡のナイフ形石器の中にみられる。このc II型は、東北、中部地方の代表的なナイフ形石器として出土している（山形県横道遺跡、金谷原遺跡、長野県杉久保（A I群）遺跡等）。

しかしながら九州地方では、その出土例が少ないため、素材、刃部傾斜角度等の明確な判断を下すことができない現状である。

c III型

このc III型のナイフ形石器も1点だけであるため（原遺跡出土）c III型が、九州地方に多数の量出土するか否かは、現状の段階では不明である。

c III型は、背の部分全面にBluntingを施すのではなく、先端部はBluntingを加えず、胴部の部分に施している。そのため刃部傾斜角度は、大きく252度を示す。素材は、Small Blade状剥片の可能性が強く、折断、切断技法は、持ちいていない。先端部、基部の両方とも尖がる形態を示し、小型のナイフ形石器である可能性を持っている。

(4) d型

d I型

d I型のナイフ形石器のBlunting加工は特殊な状態である。背の部分の一部（特に先端部縁辺）とそれに相対する基部の縁辺の一部分に施している点である。素材は、縦長剥片、Small Blade状剥片を利用し折断、切断技法はみうける例もあるが、むしろ素材をそのまま利用し、Bluntingを加える方法であろう。

刃部傾斜角度は、85度、150度、128度とさまざまにこれは、基部側のBlunting加工の部分の長さにより異なるものである。先端部は尖がり、基部側は丸みを持つものと、尖がっているものがある。しかしながらd I型のナイフ形石器の発見例が九州地方では少ないため明確には判断することができない。

d II型

d II型は、本来的には、d I型の中に分類されるものであろうが、ここでは、Bluntingの部分及び刃部傾斜角度により分類を行なった。刃部傾斜角度は、130度内外にまとまり、Bluntingの加工部分は、背の部分と基部の部分（基部の中央部は加工がなく刃部側の縁辺に加える）に加え、素材は、Blade状剥片、Small Blade状剥片を主体としている。先端部、基部の尖がり具合は、先端部はほとんど尖がっており、基部は平坦面を持つ。d II型は、九州地方では小型が多い。

(5) e型

e I型

e I型のナイフ形石器は、形態的には尖頭状を示すが、製作技術から考えるならばナイフ形石器の中に組み入れられるべき石器である。Bluntingは、背の縁辺の一部と基部の部分に施し、素材はBlade状剥片を主体として、刃部傾斜角度は100度内外を示し、bulbは基部側と一定し、一部の

ナイフ形石器では bulb も存在する例もある。また先端部は尖がり、基部は尖がるものと平坦面を持つ例がある。

e II型

e II型も e I型と同様の形態を示し、尖頭状（尖頭器の形態に近い）だがBluntingの加工技術によってナイフ形石器と考え得る石器で、ここでは、ナイフ形石器の一種としてとらえておく。（ナイフ形石器の規定及びその機能を論じられている段階であるためと、ナイフ形石器の名称自体の規定^{注9}についての明確な判断を下す現状であるため）。この e II型のBluntingは、基部の部分の両縁部にBluntingを施し、素材は、Blade状剥片、横長剥片を利用し、Blade状剥片を素材とする場合には、折断、切断技法はみられず、横長剥片の場合に行なわれる傾向がある。しかし e II型はそのほとんどが縦長剥片を素材として選んでいるようである。また先端部は尖がり、基部は平坦面を持つことを特徴とするナイフ形石器である。

e III型

e III型のナイフ形石器は、形態的観察によると、先端部は尖がり、基部は平坦面を持つ。平坦面の部分は、Blunting加工は施されておらず、Bluntingの加工部分は、背の部分と基部の一部に加えられている。刃部傾斜角度は100度から120度内外を示し、例外的に60度を示す石器もある。この点から素材は、Blade状剥片が主体をなし、折断、切断技法は持ちいておらず、bulb, platform を有する場合が多い。

また、大型のナイフ形石器の存在も知られている。e II型と e III型の区別は、e II型が両縁部のBluntingを持つのに対して、e III型は、平坦面こそ持つが、背の部分全面にBluntingを施す技術と形態的観察により区別した。

(6) f型

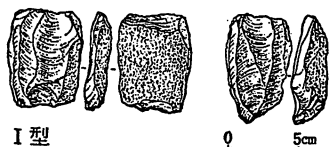
f型は、長方形で先端部・基部は平坦で、これは、折断・切断された面を加工をくわえずそのまま利用したためである。この素材は、縦長剥片・Blade状剥片を折断・切断したものに背の部分のみにBluntingを加える方法を持つ。そのため背と刃部とは平行である点が特徴となる。池水寛治氏は、これの f型のナイフ形石器を上場技法から得られた剥片を利用して作成されたとも考えている^{注10}ようである。

2. 製作技術の問題

(1) 素材について

九州地方のナイフ形石器の素材は、不定型石核から剥離された縦長剥片と考えられてきた^{注11}。しかし現在、調査発掘が進むにつれて層位的に、形態的に、技術的に明らかになりつつある。九州地方にも定型石核と考えられる石核が出土し、九州地方のナイフ形石器の素材も定型石核から剥離された剥片を利用していることが明確となりつつある。ここでは、九州地方の定型石核と考えられている石核についてのべることにする。

九州地方で定型石核と考えられる石核の出土地点は、部木（現在は、蒲田遺跡）鈴桶、平沢良、



I型



III型



II型

岡本，経ヶ峰，船野，下那珂，岩土原，出羽洞穴，上場遺跡等を上げることができ，これらの遺跡の石核を検討してみると，四つの型式に分類できる。

I型式…^{注12}鈴桶型刃器技法に代表される石核で，拳大の角柱状の礫を利用し，上下両端に打面を持ち，その打面は，Plain Platform（平坦打面）で，その打角角度は，50度から60度を持ち，頭部調整を行なって刃器を剥離する方法で，刃器剥離にも順序があり両側から剥離し，最後に中央部を剥離する方法をとり，その後石核を逆に立て同じ剥離を行なっていく方法を持つ。その結果，一方方向の面からだけ連続的に刃器剥離を行なって行くために背面が，半面に近い状態を自然面を持つことを特徴としている。

II型式…打面は，平坦打面であるが，一端のみからの剥離方向を示し，小形の石核が多く，上下の打面を持たないために，刃器は，末端部が肥厚した状態を示し，また打瘤のあるものが多い。このため刃部としては，すぐれた刃部はすくなく，石核の形態はやや不規則で，背面にはやはり自然面を持つ形態を示す。

III型式…打面は一打による平坦打面を持ち形態的には，小型で寸づまりを示すため，刃器も整ったものではなく，頭部調整もみられないため打面が大きく残り，打撃角度も90度前後を示す。この石核の剥離方向は一方，一面からだけで背面に自然面を持つ。

IV型式…打面は，調整打面で，頭部調整をもつ定型石核の完成された形態である。

刃器剥離方向は，I型式と同様に両側を剥離したのち中央部を剥離して行く方法を持つ。一方，一面剥離を主体とするが，側面にも加工が加えられている。この定型石核IV型は，九州地方では，あまり例がみられず，岩戸遺跡第III文化層中に出土しているが，実見していないので，このIV型式であるかは不明である。

九州地方の定型石核の出土遺跡をみるとほぼ3つの型式の石核に当てはめることができる。この3つの型式の中で特に出土例の多い型式は，III型であるが，I型の出土例も多い。III型の出土例は，佐賀県平沢良遺跡，鈴桶遺跡（黒曜石），岡本遺跡，経ヶ峰遺跡（サヌカイト）宮崎県船野遺跡，下那珂遺跡，岩土原遺跡，出羽洞穴，日向地方の遺跡群等（流紋岩）の石核がその可能性を持ち，I型の石核の出土例は，鈴桶遺跡，原遺跡，堂崎遺跡，部木遺跡（黒曜石）等の遺跡で出土しており，現在のところ西北部九州に集中している傾向がみられる。

また一方定型石核に対して、九州地方では、不定型石核により剝離された剝片を素材としている例が多い。

この不定型石核の技術に関して、宮田山遺跡等の瀬戸内地方の不定型石核の技術の影響（連続的に目的的に剝離する技術を持つものが、九州地方に導入されたと考える方法）か、もしくは、定型石核の技術のみだれによって生じたものかという二つの問題が生じてくる。この二つの問題は、別の機会に論ずるとして、九州地方では、定型石核と考える石核と同時に不定型石核を持つ船野遺跡、堂崎遺跡、上場遺跡、原遺跡等の層位的確認から考えるならば、定型石核の技術のみだれによって生じた技術ではなく、筆者としては、瀬戸内地方の連続的に剝離する技術の導入と考えたい。さらに遺跡によって、時期によって定型石核だけを持つ場合と、不定型石核と定型石核（特にⅡ型の石核）の両方を持つ場合が考えられる。

(2) Bluntingについて

ナイフ形石器の刃潰し加工は、本来どういう意味を持つものであろうか。刃潰し加工は、その大部分が主要剝離面側からの打撃により、その角度は、直角に近い状態を示す。ではなぜ主要剝離面側からの剝離を主体とするのであろうか、一つの考え方は、主要剝離面側からの剝離の方が、より刃潰し加工に適した角度を作りうることで、つまり、剝離面（主要剝離面を示す）の状態が、フラットな面を持ち、platformとして利用できる利点を持ち、これは、直角に近い角度を作ることが容易であること、打撃により作りうる剝離の最大の利点を利用したものと考えられる。では、なぜ刃潰し加工が必要なのか、なぜ直角に近い角度を必要とするのか、これらの必要性は、機能によって生じた必要条件であったはずである。この必要条件を考えてみると、①、刃部の部分以外は、対象物に接しないため、刃潰し加工の部分は、間接的な状態で対象物に対して刃部の力となる必要性がある。

②、先端部を鋭利にするため、石器自体を折れにくくするため、③、物に着柄するために必要性が生じ、先端部の鋭利さを必要とする場合などが考えられる。これらの問題は、機能についてのべる時に触れるとして、ここで原遺跡（杉原、戸沢1971）の特殊調整加工をもつナイフ形石器にふれてみたい。

このナイフ形石器は、「基部右縁の末端から1cmほどの部位にだけ約1cmの長さにわたって表面からの剝離がみられる一中略一いま仮にこの部位に直線で結んでみると、刃の縁とはほぼ平行する形になることが、この特殊加工の意味を推測する一つの手がかりとなるかもしれない。」としBluntingの特殊性を強調している。つまりこの特殊加工は、必要上生じた加工であり、そこに人間の意志によって目的的に作り出されこの機能によって生じた加工は、注目しなければならない。ここで筆者は、ナイフ形石器のBluntingの重要性をのべてみたい。現在、ナイフ形石器が出土する地点及び、その数は、しだいに多くなりそれにとまって中間的な石器（ナイフ形石器とも台形様石器とも区別のつきにくい石器の出現、尖頭器的要素をもつナイフ形石器的な石器）が出ているが、ナイフ形石器は、形態と技術、特にBlunting技術を主体として、その器種を区別しなければならず、この器種の明確化は、機能を考えるとき必要な条件であるからである。

現在のナイフ形石器は、形態的観察により名称を名付けられたにすぎず、ナイフ形石器の形態

的、技術的、機能的観察により、与えられた名称ではない。筆者は、ナイフ形石器を形態的、技術的、機能的にみて、もっとも重要視しなければならないのは **Blunting**加工の部分であると思う。結論から言えばナイフ形石器を規定する第一条件は、**Blunting**加工部分であり、第二に形態学的観察と考える。現在、機能論が論義の話題に上がっているがより機能を明確にするためには、ナイフ形石器の規定から考えなければならないと筆者は考えている。より中間的な要素をもつ石器に関しても、一方では、ナイフ形石器とし、他方では、尖頭状石器等とする不明確な規定では、機能や用途を考察する上で、また形式分類等を考える上で困難をまねく虞れがある。以上のような現状であろうと筆者は考えるのであるが、この現状を打破するためにもう一度、ナイフ形石器の規定問題に立返り考察する必要性を感じる。もちろんナイフ形石器の **Blunting**加工部分のみだけを重要視するのではなく、形態的、技術的、機能的に明らかにしなければならない。機能を考察する場合（最終的結論）においてもナイフ形石器の素材、大型・小型の問題、使用痕（擦痕、磨滅痕）の問題、形態による区別、技術的区別等の総合的に考察して行かなければならないが、より特徴的な部分から考察していく必要性を感じる。また中間的な要素を持つ石器に関しても特徴的な部分と総合的な考察を行なうことにより明確に規定して行けると思う。その点 **Blunting**加工の有無は規定の一つの要素となりうるものであろう。筆者は、ナイフ形石器を **Blunting**加工と形態的観察でとらえているが、ナイフ形石器の範囲を台形石器、台形様石器、切出形石器を含むものと考え、その石器の形態的、技術的、機能的に区別し、従来ナイフ形石器と呼ばれているものをナイフ形石器のⅠ型、台形石器、台形様石器をⅡ型（台形石器と台形様石器とは区別できるものと考えている。そのため台形石器をⅡA型、台形様石器をⅡB型として区別する）、切出形石器をⅢ型として区別している。ナイフ形石器、台形石器、台形様石器、切出形石器をⅠ型、ⅡA型、ⅡB型、Ⅲ型と区別した点は、形態的類似性、技術的斉一性、機能的類似性を持つためである。この斉一性、類似性とは、すべて **Blunting**加工を技術的要素とし、形態的に観察するかぎり刃部傾斜角度の差だけを持ち素材の選択等においても、その石器の機能によるわずかな相異を持つだけで、機能においても形態的、技術的観察からみるかぎり、そう大きく異なっているものではなくむしろ同系統の機能（ナイフ形石器Ⅰ型における機能は、形態的、技術的観察により筆者は、3ないし4つの機能の区別が考えられると考察する）を有していたと考える。つまり筆者、Ⅰ型、Ⅱ型、（ⅡA型、ⅡB型）Ⅲ型の共通点である **Blunting**の技術を重要視するわけである。なおこの稿は、ナイフ形石器のⅠ型を主眼におき考察している。

3 機能の問題 ^{注13}

ナイフ形石器の形態的、技術的観察から機能を考察してみると、多数の形態、技術、及び時期的に広い範囲に認められることを注目せねばならない。このことに注目すればナイフ形石器が一つの機能しか持ちえなかったとは、考えにくく、ナイフ形石器といっても3ないし4つの機能を持っていたと考える必要があるのではないであろうか。筆者は、「**Blunting**について」の中で、問題を3

つほど上げたが、これらのことに関してまずのべ、次にナイフ形石器の大型、小型についてのべてみたい。

(1) Bluntingからの機能について

① 刃部の部分以外は、対象物に接しない場合

この場合、直接的にふれる部分は、刃部だけで、Bluntingの部分は、刃部の手助けとして力を入れる部分となり、その場合、機能として考えられるのは、物を削る、切る、ひきさく、(Cutting-tool)等の機能が考えられ、これは第二次生産用具として考えられる場合が強い。

② 先端部を鋭利にする場合と石器自体を折れにくくする場合

先端部を鋭利にする機能は、その部分が対象物に接する場合である。この場合の役目はどんな物であろうか、この目的として、物にささる場合、切り口を作り次の作業をスムーズにする場合が考えられ、物にささる場合(刺突具的要素)はナイフ形石器自体が、剝片自体の厚さのうすい状態よりも、先端部が尖がり、厚さも有り、物に対してスムーズにささることを目的としていたならば、Blunting加工は、これほど適した加工はないであろう。

また、切り口を作り次の作業をスムーズにする場合も同様である。

ナイフ形石器を折れにくくするための加工の場合、縦長剝片を素材としている場合など折れやすい欠点を持っている。Bluntingにより厚くし少しでも折れにくくするためにも十分効果があると考えられ、他の利点は、先端部が鋭利で断面が厚い形態を示すため、より効果を発する方法であろう。

③ 物に着柄するためにBluntingを行った場合

Bluntingの部分における形態分類の中で、a型は、刃部をのぞく全縁にBluntingを加え、b型においては、背の部分を中心とし、c型では、基部と先端部の一部分を行っている。

このように先端部及び背の部分と同様に基部の部分のBluntingは、目的的に形成されたものと判断しなければならない。基部の部分に注目すればその目的となった加工は、(1)物に着柄しやすくする目的で加工したもの、(2) ナイフ形石器自体使いやすいうように、及び、にぎりやすくするため背と基部との部分に加工を加える場合とが考えられる。

(1) この場合、基部のBlunting加工の部分が着柄された場合、着柄された物と石器が、はずれにくくするための目的を持つこと、背の部分は、より鋭利に先端部を形成するための目的と、第二次生産用具として使われた場合においては、手をかけ、力を入れる部分となる目的を持つことになる。

(2) 大型、小型の意味についてナイフ形石器が大型である場合と、小型である場合では、おのずとその使用方法が異なるものである。ナイフ形石器自体大型であればそれ自体単独で使用することが可能であるし、着柄したとしてもその道具は、十分に機能を発揮したであろう。しかしながら小型のナイフ形石器の場合、単独で使用してその機能を十分に発揮できるであろうか。

わずか3cmにもみえない石器が単独で道具として使用可能であろうか。むしろ、より機能を発揮できる着柄という手段をとる方が道具として使用の役割をはたすのではないか。

次に筆者は、形態分類においてBluntingの部分により6型式に区別したが、この6型式の形態か

ら観察して機能を考えてみたい。

まず、鋭利な縁部を残し、他の縁部にBluntingを加えたa型、特にa I型、a II型において折断・切断技法を持ち、先端部は尖がり、小型である点に注目し単独で使用する可能性よりもむしろ着柄してその機能を十分に発揮できる形態を示すと考えられる。特にa I型におけるBluntingの部分、つまり刃部と基部側のBluntingの接する所は角度をもち、着柄された場合は、かえしの部分の役割を持つ可能性を持っている。

a III型、a IV型においては、a I型、a II型とは異なり、大型なもの、及び先端部、基部の尖がり具合、折断、切断技法を持つものと持たないもの、及び形態を考えてみて、単独で使用された場合と、着柄された場合とが考えられるが、着柄された場合の方が多いためと思われる。次に刃部を多く利用した可能性を持つ形態は、b型、f型の二つが考えられる。b型において先端部の尖がり具合は丸みを持つものが半分を示し、また、小型、大型と大きさは一定せず、折断、切断技法はほとんどみられない状態である。またb型のBluntingの部分は、いかにも機能を考えさせる形態を示し、大型のナイフ形石器もみられるところから大型は、単独で刃部を多く使用された可能性を持ち、小型の場合は、単独で使用された可能性よりもむしろ着柄し、刃部を利用する可能性を持つものであろう。

f型は、形態から考えるならば、刃部を多く利用した可能性と、着柄の可能性を持ち、小型の場合などは、組合せ道具としての可能性も考えられるものである。

c型、d型、e型においては、先端部の鋭利な部分を利用する機態を暗示する形態を示している。c型は、基部と先端部とにBluntingを加え先端部の鋭利な部分をその主体的に、使用する可能性を示し、c型のすべての先端部、基部が尖がっていることは、注目しなければならないであろう。

d型においては、基部の部分は平坦面を持ちながら加工を加えてあること、及び先端部の尖がる部分、大型のもの、小型（小型といってもほとんどが4cm内外を示す）のものなど形態からc型と同様の機能と考えられる。

e型は、形態的に尖頭状を示していること及びBluntingの部分の特殊性から考えて、先端部を利用する機能を持っている。

このc型、d型、e型における先端部の鋭利な部分を利用する点は、刺突具の可能性を持つ石器であろう。

このようにナイフ形石器の機能は、3ないし4つの機能が考えられる。しかし、使用痕、擦痕については、現在研究段階にあるので、この稿での結論は提出しないことにする。

— おわりに —

九州地方のナイフ形石器の形態学的型式を中心に述べてきたが、現在まだ研究段階の筆者が、九州地方のナイフ形石器について論ずるのは、力量不足と資料理解不足のため結論を導びきだすことができず本稿をおえるがこの点、先学諸兄のおしかりを受けるところであるが、あえておしか

りをうけたく本稿を手がけたしいです。本稿を終るにあたって、この機会を与え、おしかりを下された賀川光夫先生、小田富士雄先生、橋昌信先生に特に橋先生に対して多くの指導を受け、さらに旧石器の発掘につれていただいていたことに感謝の意を、また、資料分析及び助言、未発表資料をかして下さった松岡史氏、上村佳典氏、藤田和裕氏、飛高憲雄氏、力武卓二氏、御教授下さった長崎大学の内藤芳篤先生、正林護先生、坂田邦洋氏等に、資料分析を手つだって下さった別府大学学生諸君に感謝の意を表したい。

- 注 1. 九州地方でのナイフ形石器自体の研究は、西北部九州での発掘調査にともない平沢良、原、鈴桶遺跡〔杉原、戸沢氏の一連の調査〕等のナイフ形石器の研究があり、芹沢、謙木、間壁氏らの研究〔日本の考古学、先土器時代九州地方〕及び富樹松岡氏らが長年資料を保管され、九州地方のナイフ形石器の複雑な様相を指適された研究などが上げられ、近年では、上場遺跡、石飛遺跡等〔池水寛治氏〕の層位的、共伴遺物の把握や最近では、住居跡、石器製作所跡等が発見され今後の研究に役だつ調査や、船野遺跡のナイフ形石器と共伴遺物の複雑化、層位的把握等の研究がなされている。
- 注 2. 層位的、組織的、体系的、編年的にとらえられはじめからまもない時期であるが、それでも九州地方のナイフ形石器、共伴遺物等は、平沢良、原、鈴桶、百花台、福井洞穴、石飛、船野、出羽、岩戸遺等跡の研究が行われている。
- 注 3. 橋昌信氏、上村佳典氏及び筆者は、ナイフ形石器を形態的に観察して、わかりやすく分類できる方法を論じ、ナイフ形石器の特徴である Blunting の部分による分類、及び刃部の傾斜角度により刃別が可能であるか否かを発表する段階までこぎつけた、しかしながらまだ数多くの問題がのこり、刃部傾斜角度の計測方法でも欠点だらけで、もう少し明確に区別できる方法があると考えているが、現在はこの方法で計測を行なっていくたい。
- 注 4. 形態分類で 6 型式に区別きでたが、九州地方には、まだ特殊な形態を示すナイフ形石器らしき石器がある。6 型式が九州地方のナイフ形石器の形態のすべてではなく 7 ないし 8 つの型式に分類できる可能性も考えられる。
- 注 5. 九州地方のナイフ形石器の素材は、縦長剥片、Small Blade 状剥片、Blade 状剥片、横長剥片であるが縦長剥片、横長剥片は、不定型石核から剥離され、この不定型石核は、宮田山型ナイフ形石器の時期の石核と同様に任意的に連続的打撃によって剥離石核する石核と同様であろう。
- 注 6. Small Blade 状剥片、Blade 状剥片としたのは、Small Blade-core、Blade-core の存在が不明確である

場合、及び技法が不明確であるため、現在の段階では、SmallBlade状剥片とした。

注 7. 折断、切断技法について、ナイフ形石器を製作する段階でよく切断、折断という名称を我々は利用している。しかし切断とは、切りとるという意味をもち、折断とは折りとるという意味を持っている。ナイフ形石器を製作するときこれらの技法を利用した可能性を持つ。筆者は、折断技法とは、折りとる、つまりノッチ状の剥離を加えて折りとる場合と、ノッチ状剥離を加えず折りとる場合にこの名称を持ち、切断技法とは、加工により剥離しながら形態を整えていく場合に持ちいられ、ノッチ状剥離でも切りとったと判断できる場合にこの名称を使いたい。つまり台形石器等の製作技術から推定できる技法は、折断技法を考え、ナイフ形石器の製作技術からは切断技法を有していると考えられるものと、折りとりその後にBluntingしを加える場合とが考えられ、ナイフ形石器自体、折断と切断という二つの技法を考えている。しかながら現在では、その製作技術の中で明確に規定できる資料はない。

注 8. 大型ナイフ形石器と小型ナイフ形石器

原遺跡〔考古学集刊四巻四号、杉原荘介、戸沢充則（1971）〕において、大型ナイフ形石器と小型ナイフ形石器を形態的に統計的に規定しているが、筆者も同様な意見である。ただ筆者はナイフ形石器が 5cm 以上と 5cm 以下とはある意味を持つものとする、それは、それ自体で使用可能と考えられるものと、それ自体では、小さすぎて、何かの手助けをかりなければ使用不可能な場合を考えるからである。つまり着柄の可能性を持つもので、この点に関しては機能の中で考察している。

注 9. 現在、eI型、eII型のナイフ形石器にはさまざまな名称(尖頭状ナイフ形石器、尖頭状石器尖頭石器等)がつけられている。しかしながらその名称は形態から名称をあたえられたにすぎず(ナイフ形石器という名称も同様である)石器は、形態的、技術的、機能的考察から考え合せて名称をつけるべきであり(それまでの仮称が、いつのまにかその石器の名称となる可能性が強い)筆者はBluntingの製作技術及び機能、形態から名称をあたえる必要性を感じる。しかし明確に規定できる名称を持ち合せてないためナイフ形石器という名称をつかう。

注10. 上場技法は、池水寛治氏が上場遺跡の台形石器、台形様石器、プロト台形石器の製作過程を理解する上で、製作技法の存在を明らかにし、これを上場技法となづけた。(1969年もぐら8号) この上場技法は、石刃を2ないし3個に折断しそのままプロト台形石器として利用したと考察した(Bluntingを加えず石器として)折断面がBluntingの役割をはたすものとして利用したと考えているが、これと同時にその副産物の剥片をナイフ形石器として加工する、つまり台形石器の製作が主であり、その副産物の利用としてナイフ形石器を作成すると考えている、しかしながら F型のナイフ形石器は、4cm内外の長さを持ちその素材の縦長剥片は 8cm内外のものでなければならない、上場遺跡の石核をみるかぎり 4cm内外の剥片をとるのがやっとの石核であろう。また小田静夫氏の「台形石器について」【物質文化18.1971.P12】の中でのべているごとく、百花台遺跡の台形石器の製作過程と上場技法との関連性、上場遺跡の特殊技法ととらえるかという問題を解決しなければならないであろう。

注11. 鎌木義昌氏、間壁忠彦氏は、九州地方のナイフ形石器を九州独自の形態を持つとして九州型ナイフ形石器という名称をあたえ、その規定は「九州型ナイフ形石器として、不定の石核から剥ぎとったやや縦長の剥片から作られる、剥片の一辺の一部分のみを残して、その他の部分の全面にわたって二次加工を加え、ナイフあるいは、切出しナイフ形に仕上げるのであるが縦長剥片をあたかも切りとった様な仕上がりとなっており加工のくわわっていない部分が主として使用されたようである」【日本の考古学先石器時代、九州地方】

との定義をうち出している。しかしながら九州地方でこれらの定義にあてはまるナイフ形石器は、ごく一部分で、茂呂型ナイフ形石器の定義と同様に広義に解釈しなければならないであろう。また九州地方には6型式の形態がみられること、また九州地方で九州型ナイフ形石器は、西北部九州に集中しているとのことであるが、この種のナイフ形石器は、九州地方全域に出土していることなどから、再度検討しなければならないし、九州型ナイフ形石器という名称自体、問題があり、九州地方を九州型ナイフ形石器1つで代表されるとは、考えられないからである、ゆえにここでは、九州型ナイフ形石器という名称はつかわない。

注12. 鈴桶刃器技法に関して、縄文時代の技法であろうとする説がある。鈴桶遺跡〔考古学雑誌第51巻3号、杉原、戸沢、横田、1966P24補註2〕で、鈴桶遺跡に近い遺跡で縄文後期の石器群が発見され、その中に鈴桶型石核、刃器や石鏃、土器片が表採されたもので、この疑問は、盗人岩陰遺跡〔佐賀県〕で表面化してきた。盗人岩陰遺跡では第Ⅲ層から第Ⅴ層にかけて押型文土器片、横目文土器片と共伴して「鈴桶型石核」といえる石核が出土している〔考古学ジャーナル1972、部木遺跡の出土石器、国平井上〕現在では、確実に層的に鈴桶刃器技法の把握が必要になってくるが、ここでは、確実にその出土例がふえるまで、鈴桶刃器技法は旧石器時代の石核としてとらえたいが、疑問は大きくその輪をひろげている。

注13. ナイフ形石器の機能に関する研究は、大きく大別して三つの系統で押し進められているようである。

① 小田静夫氏の形態学的型式論で、ナイフ形石器を三型式に分類「組合せ道具の barb」「先端につけられ恐らく arrowhead」「直接手で握られ knifeとしての用途」とする方法でナイフ形石器の機能も三つの用途を持ちえたとする意見（1969小田）、② 芹沢氏のナイフ形石器の機能論は、「ナイフの身の形をしその機能もだいたいおなじであったと考えられる」とする「切る道具」意見（1960、芹沢）、③ 滝沢氏のナイフ形石器の先端部の擦傷を指摘した「飛び道具」とする意見（1963、滝沢）の三つ意見が提出されている。

引用参考文献

- 杉原 莊介他（1966） 「九州における特殊な刃器技法」 考古学雑誌 第51巻第3号
- 杉原 莊介（1962） 「佐賀県伊方里市平沢良の石器文化」 駿台史学12
- 戸沢 充則
- 芹沢 長介（1957） 先史時代—無土器文化—考古学ノート1 日本評論新社
- （1961） 日本における細石器文化 歴史教育9—3
- （1967） 大分県岩戸旧石器時代の遺跡調査 考古学ジャーナル11
- 賀川 光夫（1971） 西日本における礫器の問題 第四紀研究10—4
- 賀川 光夫（1970） 永岡遺跡、周辺遺跡について 福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告1
- 橋 昌信
- 鎌木 義昌（1965） 九州地方の先土器時代 日本の考古学Ⅰ先土器時代
- 間壁 忠彦
- 杉原 莊介（1971） 佐賀県原遺跡における細石器文化の様相 考古学集刊4—4
- 戸沢 充則
- 富樹 憲次（1962） 唐津周辺の細石器（Ⅱ） 考古学手帖16
- 戸沢 充則（1963） 唐津周辺の細石器（Ⅲ） 考古学手帖18
- 和島 誠一（1963） 島原半島百花台遺跡の調査 日本考古学協会昭和38年度大会研究発表要旨
- 麻生 優
- Oda Shizuo（1969） Some Aspects of Japanese Preceramic Age : The Microlithic Tendency

in the Southwestern Parts of Japan 人類学雑誌77—5

- (1971) 台形石器について 物質文化18
- 大井 晴男 (1968) 日本先土器時代石器群の系統について 北方文化研究 3
- (1970) 型式学的方法への試論 考古学雑誌55—3
- 池水 寛治 (1967) 鹿児島県出水市上場遺跡 考古学集刊 3—4
- (1967) 上場遺跡 もぐら 6号
- (1968) 熊本県水俣市石飛分校遺跡 考古学ジャーナル21
- (1969) 上場技法とその展開 もぐら 8号
- (1970) 水俣市石飛遺跡の調査 もぐら 9号
- 芝本 一志 (1966) 伊万里湾沿岸における無土器文化 古代学研究46
- 下川 達弥 (1970) 佐世保市の先史文化概観 考古学ジャーナル 4
- 高木 正文 (1971) 熊本県玉名郡菊水町発見の先土器時代遺物について 九州考古学41—44
- 清水 宗昭
- 国平 健二 (1972) 福岡県部木遺跡出土の石器 考古学ジャーナル 6
- 井上 直樹
- 福岡市教育委員会 (1971) 福岡市埋蔵文化財遺跡地名表総集編 1 福岡市埋蔵文化財調査報告書第12
- 長崎県教育委員会 (1971) 堂崎遺跡調査報告書
- 福岡県教育委員会 (1970) 野黒坂遺跡 福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告 1

図—2 におけるナイフ形石器の形態分類における図のナイフ形石器の出土地点

上場遺跡、石飛遺跡、南志田遺跡、原遺跡、遠目遺跡、平沢良遺跡、笹ノ尾遺跡、堂崎遺跡、綿打遺跡
中原遺跡、百花台遺跡のナイフ形石器を借用した。縮尺は不統一。

図—4 の定型石核の分類の図面は、鈴桶遺跡、平沢良遺跡の図をつかわせていただいた。

表～1 の追加

長崎県		佐賀県			
87	馬ノ元遺跡	96	郷美谷遺跡	103	姫方遺跡
88	生向	97	板山		福岡県
89	嶋山池	98	福田	104	金山遺跡
90	ナンゴラ池	99	満場越		
91	中瀬	100	西方の池		
92	大崎	101	高畑		
93	中野 B ₁	102	牟田張		
94	中野 B ₂				
95	大塔				

表～2 形態分類 Bluntingの部分及び刃部傾斜角度による分類

遺 跡 名	形態分類	刃部 角度	素 材	折・切断	bulb { 上 下 有 無	先 端 部 分	基 部 部 分	大型 小型	石質	二次 加工	右刃 左刃	備 考
佐賀 南志田遺跡	a I型	82°	横長剥片 小型	なし	横 二次加工 により cut	尖がっている	丸みをおびる	小型	ob	基部の 部分	右刃	a I型17点 右刃13 左刃4
熊本 石飛	"	76°	横長剥片	あり	横 cut	"	"	"	頁岩	"	"	
"	"	97°	不定石核からの 縦長剥片	有、 胴部利用	先端方向 cut	"	"	"	ob	"	"	
福岡 野黒坂	"	88°	縦長剥片	有	"	"	"	"	"	"	"	
宮崎 船野	"	90°	不定形、小型 縦長剥片	"	基部 cut	"	平坦面をもつ	"	"	"	左刃	
佐賀 原	"	75°	Small Blade	"	先端部 cut	"	尖がっている	"	"	"	右刃	
"	"	97°	"	"	"	"	"	"	"	有	左刃	
" (表)	"	82°	Small Blade状 剥片	"	"	"	丸みをもつ	"	"	なし	右刃	
" (表)	"	85°	"	なし	基部側 cut	"	"	"	"	"	左刃	
" (1962)	"	90°	"	有	先端部 cut	"	"	"	"	"	右刃	
"	"	94°	"	"	"	"	尖がっている	"	"	"	"	
"	"	71°	"	"	基部 cut	"	丸みをもつ	"	"	"	"	
"	"	80°	"	"	先端部 cut	"	尖がっている	"	"	"	左刃	
宮崎 船野	"	90°	横長剥片	"	横 cut	"	丸みをもつ	"	Li	"	右刃	
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
長崎 遠目	"	102°	縦長剥片	"	先端部 cut	"	尖がっている	"	ob	"	"	
宮崎 船野	"	90°	横長剥片	"	横 cut	"	"	"	Li	"	"	
佐賀 南志田	a II型	50°	横長剥片 (大型)	なし	横 bluntingに よりcut	丸みをもつ	丸みをもつ	小型	ob	なし	右刃	a II型15点 右刃8 左刃7
長崎 堂崎	a II型	59°	横長剥片	有	上部 cut	尖がっている	平 端	小型	ob	なし	左刃	
"	"	60°	"	"	基部 cut	丸みをもつ	丸みをもつ	"	"	有	右刃	
福岡 四三島	"	65°	縦長剥片	"	上部 cut	"	"	"	"	"	左刃	

(ob. 黒耀石)
(Li. 流紋岩)

遺 跡 名	形態分類	刃部 角度	素 材	折・切断	bulb { 上 下 有 無	先 端 部 分	基 部 部 分	大型 小型	石 質	二次 加工	右刃 左刃	備 考
野黒坂	"	64°	"	なし	基部 cut	尖がっている	"	"	"	"	右刃	
四三島	"	60°	横長剥片	有	横 cut	丸みをもつ	平坦面をもつ	"	"	なし	左刃	
佐賀 平沢良	"	85°	"	なし	"	"	丸みをもつ	"	"	有	右刃	
原	"	56°	不定形 縦長剥片	有	先端部 cut	尖がっている	尖がっている	"	"	なし	"	
"	"	51°	横長剥片	なし	横 有	丸みをもつ	丸みをもつ	"	"	"	"	
"	"	68°	Samall Blade	有	横 cut	"	尖がっている	"	"	"	左刃	
" (1962)	"	62°	" 状剥片	"	先端部 cut	"	"	"	"	"	"	
" (1962)	"	50°	不定形 横長剥片	"	横 cut	"	丸みをもつ	"	"	"	"	
" (1962)	"	35°	"	"	"	"	"	"	"	"	右刃	
長崎 明賀谷	"	56°	不定形 縦長剥片	有	基部 cut	"	"	"	"	"	左刃	
遠 目	"	76°	不定形石核からの 横長剥片	"	先端 cut	"	"	"	"	"	右刃	
熊本	aⅢ型											aⅢ型22点 右刃10 左刃12
石飛 遺跡	aⅢ型	106°	横長剥片	なし	横 cut	尖がっている	尖がっている	小型	ob	なし	右刃	
"	"	100°	不定形石核からの 縦長剥片	有	基部方向 cut	"	"	"	"	"	左刃	
"	"	108°	Blade 状剥片	頭部折断	先端部 cut	"	"	"	"	"	"	
"	"	105°	不定形石核からの 縦長剥片	なし	基部 cut	"	"	中型	"	"	"	
福岡 針 摺	aⅢ型	112°	Blade 状剥片	なし	先端部 cut	尖がっている	尖がっている	小型	c b	有	左刃	
屋形原	"	108°	不定形石核からの 縦長剥片	"	基部側 cut	"	丸みをもつ	"	"	"	"	
野黒坂	"	119°	縦長剥片	有	"	"	"	"	"	"	"	
"	"	115°	不定形石核からの 縦長剥片 (小型)	なし	"	"	尖がっている	"	サヌ カイト	"	右刃	
中牟田 鬼神山	"	95°	"	有	先端部 cut	"	"	大型	チャー ト	なし	右刃	
奈多海岸	"	130°	Blade 状剥片	なし	基部 cut	"	"	"	ob	"	"	

佐賀 多久市 綿 打	"	117°	"	有	先端部	cut	"	"	"	"	有	"	
渚	"	128°	Blade 状剥片	"	"	"	"	"	小型	"	"	"	
鈴 桶	"	102°	Small Blade	なし	"	"	"	"	"	"	なし	左刃	
佐賀 平沢良	"	118°	Blade	"	"	"	丸みをもつ	"	大型	"	"	右刃	
原	"	108°	Small Blade	有	基部	cut	尖がっている	"	小型	"	"	"	
" (表採)	"	128°	Small " 状剥片	"	先端側	cut	"	"	大型	"	有	左刃	
" (")	"	103°	"	"	"	"	"	"	小型	"	"	右刃	
"	"	154°	Small Blade	"	基部	cut	"	"	"	"	"	左刃	
"	"	101°	"	"	先端部	cut	"	"	"	"	"	"	
" (1962)	"	98°	Small Blade 状剥片	なし	"	"	"	"	"	"	"	"	
" (")	"	127°	"	有	"	"	"	"	"	"	"	右刃	
長崎 白似田	"	115°	"	"	"	"	"	"	"	"	なし	左刃	
	aIV型												aIV型10点 右刃 5 左刃 5
明賀谷遺跡	aIV型	97°	縦長剥片	有	先端部	cut	尖がっている	尖がっている	小型	ob	なし	左刃	
福岡 野黒坂 "	"	40°	小型 縦長剥片	なし	基部	cut	"	平坦面をもつ	"	"	有	右刃	
佐賀 鈴 桶 "	"	86°	Small Blade	"	先端部	cut	丸みをもつ	尖がっている	"	"	"	左刃	
佐賀 平沢良 "	"	70°	"	有	"	"	尖がっている	"	"	"	"	右刃	
原 "	"	75°	"	"	"	"	"	"	大型	"	"	"	
"	"	98°	不定形 縦長剥片	"	"	"	"	"	小型	"	なし	"	
"	"	75°	"	なし	基部	cut	"	"	"	"	有	左刃	
" (表採)	"	66°	Blade 状剥片	有	"	"	"	"	"	"	なし	右刃	
" (1962)	"	86°	Small Blade 状剥片	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
"	"	22°	"	なし	先端部	cut	"	"	"	"	"	左刃	
													aI型とも 考えられる が縦の 長さに 横を まいて aIV型 とした

遺 跡 名	形態分類	刃部 角度	素 材	折・切断	bulb { 上 下 有 無	先 端 部 分	基 部 部 分	大型 小型	石 質	二次 加工	右刃 左刃	備 考
熊本 石飛 遺跡	b I型 b I型	180°	横長剥片	なし	bluntingによっ て横 cut	丸みをおびる	丸みをおびる	小型	ob	なし	右刃	b I型 9点 右刃 3 左刃 6
鹿児島 御 岳	"	181°	不定石核からの 縦長剥片	末端利用 折断 有	基部の方向を示す	尖がっている	"	"	"	"	"	
熊本 中 原	"	193°	" (小型)	なし	横 cut	"	平端に近い	"	"	"	"	
福岡 野黒坂	"	180°	横長剥片	有	"	"	丸みをおびる	"	"	"	左刃	
"	"	180°	"	なし	"	"	"	"	"	先端に 有	"	
佐賀 原	"	"	縦長剥片	"	基部 (有)	丸みをおびる	平端面をもつ	"	"	なし	"	
"	"	"	Blade	"	基部 cut	尖がっている	尖がっている	"	"	有	"	
佐賀 南志田遺跡	"	180°	"	有	先端部 cut	"	丸みをもつ	"	"	なし	"	
熊本 石 飛 "	b I型	173°	横長剥片 (大型)	有	横 刃部側	尖がっている	丸みをもつ	大型	サヌカ イト	なし	左刃	
中 原 "	b II型	169°	不定石核からの 縦長剥片	なし	下部 有	丸みをもつ	平端に近い	中型	ob	"	右刃	b II型10点 右刃 3 左刃 7
長崎 堂 崎 "	"	163°	"	"	有	尖がっている	丸みをもつ	小型	サヌカ イト	"	左刃	
福岡 野黒坂 "	"	158°	縦長剥片 (Blade)	"	上部 cut	"	"	"	ob	"	左刃	
四三島 "	"	131°	横長剥片	"	横 cut	"	平端面をもつ	"	"	先端部 にあり	"	
福島鎖ノ神 "	"	131°	小型 縦長剥片	有	先端部 cut	"	"	"	"	なし	右刃	
佐賀 平沢良第2地点	"	150°	Blade 状剥片	なし	基部 有	"	"	"	"	有	左刃	
原 "	"	154°	不定石核より 縦長剥片 (小型)	"	" cut	"	"	"	"	なし	"	
長崎 百花台 "	"	166°	縦長剥片	"	基部側 有	丸みをもつ	"	"	"	"	右刃	
佐賀 平沢良 "	"	169°	"	?	?	"	"	"	サヌカ イト	"	左刃	
"	"	167°	Blade	なし	基部側 有	"	"	大型	ob	"	"	
長崎 百花台 "	C II型											C II型1点
"	C II型	162°	?	?	?	尖がっている	丸みをもつ	大型	サヌカ イト	なし	左刃	
"	C III型											C III型1点

佐賀 原	"	CⅢ型	252°	Small Blade	なし	基部	cut	尖がっている	尖がっている	小型	ob	なし	左刃	dⅠ型3点
佐賀 原 (表)	"	dⅠ型	85°	Small Blade状剥片	なし	基部側	cut	尖がっている	丸みをもつ	小型	ob	なし	左刃	
"	(1962)	"	150°	Blade状剥片	"	先端部	cut	"	尖がっている	大型	"	"	"	dⅡ型3点
"	"	dⅡ型	128°	Small Blade状剥片	有	基部側	cut	"	"	小型	"	"	右刃	
佐賀 平沢良	"	dⅡ型	147°	Blade状剥片(小型)	なし	基部側	有	尖がっている	平坦面	小型	ob	なし	右刃	eⅠ型2点
原(1962)	"	"	135°	Blade	"	先端部	cut	"	"	"	"	"	左刃	
宮崎 船野	"	eⅠ型	122°	Small Blade	有	"	"	"	"	"	"	"	右刃	eⅡ型1点
佐賀 平沢良	"	eⅠ型	81°	Blade状剥片	なし	基部	有	尖がっている	尖がっている	小型	ob	なし	左刃	
佐賀 平沢良	"	eⅡ型	113°	Blade状剥片	"	"	"	"	"	大型	"	"	右刃	eⅢ型4点
福岡 松延	"	eⅡ型	62°	不定形石核より 横長剥片(小型)	なし	横	有	尖がっている	平坦面をもつ	小型	ob	なし	右刃	
熊本 中原	"	eⅢ型	60°	横長剥片	なし	横	cut	尖がっている	平坦面をもつ	小型	ob	有	左刃	aⅠ型とも 思ったが 基部の部 分に平坦 面を有す ることか ら
"	"	"	140°	Blade状剥片	"	基部	有	"	"	大型	サヌカ イト	なし	右刃	
"	"	"	129°	不定石核からの 縦長剥片	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
"	"	"	96°	"	"	"	"	丸みをもつ	"	小型	"	"	左刃	